

奥野小校区の魅力

自然と歴史と人のぬくもりを知る

この資料は、6学年児童の郷土学習支援並びにホームページを充実させるコンテンツ、そして何よりも筆者自身の”奥野”を知りたい欲求にかられて、牛久市史および広報「うしく」ほかを総覧し、平成16年(2004)9月から12月にかけてホームページに掲載したものをBOOK用に編集したものです。

平成26年4月、鈴木利子校長着任、そして奥野地区住民に「昔の奥野小のようにありたいが…」との呼びかけに応え、まず平成17～25年度末迄の牛久市の人口・世帯数等統計を加え、若干の字句を改めました。校長先生の願望はわれら地区住民の希望でもあります。その一助になれば幸いです。

2014年5月31日

林 省三

牛久市教育委員会 情報教育サポーター

奥野小学校サポーター 小坂団地 4B19班 S.HAYASHI

◇ 奥野を知る ◇

出稿にあたり

奥野小学校の校区は、牛久市の市域中央部から東方に位置する、旧奥野村(昭和30年町村合併前の名称)全体を中心とした広範囲な地域です。

遺跡や史跡また伝承されているお話、あるいは土地に伝わる行事が残されており、桂川、乙戸川、小野川の自然の恵みを受けて、田、畑、果樹園、牧場までもあります。

昔の町名は、久野町・正直町・島田町・井ノ岡町・奥原町・桂町および一部を除く福田町・小坂町、一部を含む岡見町の9町。

現牛久市行政区名では、久野・大和田・桂・報徳・井ノ岡・奥原・島田・正直・中央・小坂・小坂団地・向原の12行政区。

奥野小学校創立前から、これを望み、強く支え、盛り立てて今に続く人々とこの地について、いろいろ知りたいものです。

家に伝わる話、地元の話・行事、開拓期の話、農作物の工夫などの情報をお寄せください
(連絡先は学校へ、筆者が取材に伺います)

目次		付属資料	ページ
(1)	牛久市のなりたち(誕生と変遷)	表 2-1『牛久市域の変遷(江戸時代末期～現代)』	1
(2)	牛久市3地区の人口・戸数の動き	資料 1「牛久市域:三地区の人口動態」 資料 2「牛久市行政区別世帯数と人口動態」	2
(3)	奥野地区の人口・戸数の動き	資料 3「奥野各行政区別世帯数と人口動態」 資料 4「同上指標分析」	3
(4)	牛久市域の教育:明治初頭		4
(5)	奥野地域の教育と人々		5
(6)	奥野小学校の誕生	表 2-2『奥野地域小学校の変遷』	6
付録	学校名『奥野』, その特徴		7
	奥野とのかかわり	筆者と奥野	8
表	牛久市域の変遷		9
	奥野地域小学校の変遷		10
参 考 資 料	牛久市域:三地区の人口動態	明治22年～現代迄の牛久・岡田・奥野地区の人口等	
	牛久市行政区別世帯数と人口動態	昭和45年以降ポイントの三地区別人口等	
	奥野各行政区別世帯数と人口動態	昭和45年以降ポイントの奥野12行政区の人口等	
	同上指標分析	同上分析 12行政区の伸び率・占める比率等	

以降は、ホームページと同じ内容です。

(1) 牛久市のなりたち(誕生と変遷) (2004/9/30 記)

茨城県稲敷郡牛久町が「牛久市」になったのは、昭和 61(1986)年 6 月 1 日です。

6 1 6 1 で忘れることはありません。調べていくと明治22年から昭和40年の間に、江戸時代(それ以前から?)から続いている「村々」の二度にわたる大合併によることがわかります。

最初のおおきな合併は明治22年でした。この年、明治憲法公布ですが、それと同時に既存の「村」を

集約し国の末端行政執行機関として位置づける『町村制の施行(4月1日付)』によるものでした。

このとき現牛久市を構成する三つの地域、即ち牛久、岡田、奥野地区は、それぞれ新制度による『村』として誕生しました。

河内(かっち)郡牛久村は、牛久村・田宮村・城中村・遠山村に庄兵衛新田を含む新地村の5箇村合併。河内郡岡田村は、岡見村・柏田村・東大和田村・中根村・下根村・猪子村・結束村・東狸穴村・上大田村の9箇村合併。信太(しだ)郡奥野村は、奥原村、久野村、井ノ岡村、島田村、正直村、小坂村、桂村の7箇村合併です。旧村名はすべて現在の地名や町名、また行政区名として私たちの生活に親しんでいます。

明治29年4月1日、河内郡牛久村と信太郡奥野村は『稲敷郡』と改称されています。二度目のおおきな合併は、昭和20年8月終戦後のGHQの施策によって、地方自治と分権の確立を目的に進められたもので昭和29年実施でした。

まず、牛久村が1月1日付で牛久町となり、同年4月1日岡田村と合併、新生「牛久町」になっています。さらに翌昭和30年2月1日には奥野村も合併に加わりました。このとき以来「稲敷郡牛久町」は市制施行にいたるまで、その呼称で親しまれてきたのです。この間、昭和30年7月に阿見町大字福田の一部(向原)が加わりました。

(昭和44年1月大字柏田の一部が「女化」と名称変更とあります。女化は奥野校区ではありません)

江戸時代末期から牛久市誕生までの牛久市域の変遷は牛久市史近現代Ⅰにまとめられています。その表1-2を Web 用に編集してみました。[ここをクリック](#)してご覧ください。(本資料の末尾にもあります)

(2) 牛久市3地区の人口・戸数の動き (2004/10/15 記)

牛久市域は三地区からなります。幕末時、牛久地区・岡田地区は牛久藩(山口氏)を中心に前橋藩、旗本由良氏、同土屋氏の支配地であり、奥野地区、はほぼ全域関宿藩領でした。

各地区の戸数・人口の推移を継続的に知るには明治22年以降になります。それ以前は散発的資料があり興味深いのですが、これは次回以降に譲って明治22年以降の三地区の推移を眺めてみましょう。

[資料1](#)(降順 PDF 文書 102KB、[昇順 PDF](#))は、牛久市史近現代Ⅱと市役所総合窓口課により得た資料から編集したもので、明治22年から平成25年までの人口動態を著わしています。

従って明治22年を基準に各年度の伸びと市域全体に占める各地区の割合をみることができます。鉄道の開通は明治29年でしたが、明治40年までは奥野地区は人口の多い地区でした。

牛久地区は江戸期、水戸街道が整備され、宿場(牛久宿)もおかれたのですから、人口もそれなりに多かったのでは?と考えがちですが、そうでもありませんでした。

明治維新以来、国家が急速な近代化を進めているにしても国の経済(GNP)は米作りや養蚕等副業を中心とした農業本位の時代が継続していたことをうかがわせます。農村人口の多少が経済力の大小でもあったのです。

明治41年から明治45年の人口は岡田地区と奥野地区はほぼ拮抗し、それ以降岡田地区が牛久市域発展の中核になっていきます。昭和55年から平成11年まで、牛久地区がシェア一番になっていますが、これは首都圏近郊住宅地開発による人口流入が主たる要因でしょう。その後牛久駅東口から広がる一

帯も新たな市街を形成し、岡田地区は今なお増え続けています。

奥野地区は平成7年、牛久地区は平成13年がピークでその後人口の漸減をみます。早くから人口流入のあった住宅地は子供の成長とともに流出もおきるということにほかなりません。

人口の伸びを見る限り平成25年は、明治22年に比べ牛久地区14.8倍、岡田地区23.78倍(平成25年度末時点比較)と急激な人口増となるのに対し、奥野地区は2.06倍と著しい違いがでています。牛久駅とその周辺が人口増に伴って商業施設の発展を招き、さらに住宅地が増え人口増となるといったスパイラル効果によるものでしょう。

[資料2](#)(PDF 文書 47KB)は昭和45年以降の三地区別戸数と人口の動きです。奥野地区は昭和の高度成長期に牛久・岡田地区と明らかに違っていています。奥野地区は昼間人口こそある工業団地ができていたものの、もともと地区発展の前提として“みどりの保全、田園風景を残す意思”が、地元住民にも行政にもあったとしか思えません。

牛久市でも郊外の奥野地区、人口の伸びの少ない分“古きよき昔”がいまなおあるに違いない。そう期待を込め可能な限りこの地区を探訪してみたいところです。

付録:青文字はすべてハイパーリンクです

(3) 奥野地区の人口・戸数の動き (2004/10/29 記)

今回は奥野地区をさらに詳細に見てみます。[資料3](#)(PDF 文書 69KB)は、明治22年の町村制施行時、信太郡奥野村を構成した奥原村、久野村、井ノ岡村、島田村、正直村、小坂村、桂村の7ヶ村と、これらから独立した地区に昭和30年阿見町福田から加わった向原を含めた、今日の12行政区の戸数(ほぼ世帯数)と人口の動きです。

行政区毎に昭和45年から平成25年迄の統計値であり、また牛久市全体に占める奥野地区の比率を、岡田地区、牛久地区、牛久市全体と対比し著わしています。

昭和45年の奥野地区の人口は牛久市の20.7%ありましたが平成25年(3月末)では6.3%になっています。これはこの地区の人口が極端に減少したのではなく、岡田・牛久両地区の伸びが著しいからにほかなりません。[資料3](#)の中で際立って増えているのは小坂団地です。12行政区中もっとも歴史の浅い小坂団地は昭和44年1月、25世帯で自治会を結成、9月に行政区に編入された奥野地区唯一の大規模に宅地開発された地域で、約1200区画あり現在世帯数2134、奥野地区全世帯数の46.2%を占めています。[資料4](#)(PDF 文書 65KB)は、首都圏宅地開発初期の昭和45年を基準に市制施行した昭和61年、ほか平成1年から3年毎の平成4年、7年、10年、13年、16年、19年から平成25年度末時点の行政区別伸び率および奥野地区に占める比率を表にしたものです。

「昭和45年基準伸び率」([資料4](#):上中段中央)を現在は、世帯数は漸増していますが2倍になっているのは向原のみ、小坂団地は別格の16.1倍です。ところが人口でみると小坂団地の10.9倍は別格。その他の行政区は向原1.38倍ですが、多くは昭和45年の人口を下回っています。小坂団地は比較的牛久駅に近い(7キロあるが)ものの実際に資料3をみると平成10年がピークで以降漸減しており、奥野地区全体としても平成7年がピークになっています。

「奥野地区内比率」([資料4](#):上中段右方)は、12行政区の戸数と人口とを奥野地区合計に対して示して

います。これによると準市街化調整地区で宅地開発された小坂団地は戸数、人口とも40%を超えています。そのほかでは久野、奥原といった旧奥野村名称のもとになった地区が抜き出ている、小坂がそれについています。

奥野地区の人口増はもっぱら小坂団地に限定されており、その他の地区は古くからまた明治初期や戦後開拓された純農業地区の特徴を着実に継続しているのかもしれませんが。

「奥野地区戸数当り人口」(資料4:下段右方)では、小坂団地は小坂団地以外の地区(合計)より、戸数当り人口はかなり下回っており、純農家および兼業農家戸数の多い地区と都市型移入人口の多い団地の違いは明白です。農家の世帯人口の減少傾向は世間一般の傾向と同様なのか、また農作業の機械化もひとつの要素なのでしょうか。

付録:青文字はすべてハイパーリンクです

(4) 牛久市域の教育:明治初頭 (2004/11/12 記)

明治4年(1871)の廃藩置県後、政府は文部省を設置し、欧米にならった学校制度を創設する準備を始め、翌明治5年8月「学問は身を立てる財本(もとで)」、学制の理念として「**邑(むら)に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す**」と国民皆学の方針を示しました。(牛久市史「近現代Ⅰ」詳細記述あり)

この所謂、学制発布にそって従来の藩校や寺子屋はすべて廃止し、人民一般に普通教育を受けさせる小学校の設置へと政府は動き始めます。牛久市域の小学校はすべて家塾からの出発ですが、最も早いのは奥野小学校につながった井ノ岡村の山岡藤助家塾(明治初年から「筆学」)で明治6年4月6日。そのほか慶応2年(1866)から奥原村で家塾を開いていた栗山宗春は明治7年2月4日に開業。ほかに下根村は明治7年8月16日川角辰吉が、牛久村は黒須嘉市郎、岡見村は明治8年4月鈴木柳輔を教師として岡見中宿に仮校舎を設けました。いずれも村の教育機関としての開業であり、当時の民意の高さを覗かせます。

「文部省第三年報(明治8年)」の茨城県公立小学校表に、公立として下根学校、私立として奥原学舎、井ノ岡学舎、牛久学舎、岡見学舎とあり次表のように整理できます。新治県から土浦県に管轄替えの過程でした。

	名称	教場	地名	設立年	教師(各男1)	授業料/学校主
公立	下根学校	普門院廃寺	河内郡下根村	明治7年	川角辰吉	有り
私立	奥原学舎	願名寺	信太郡奥原村	明治7年	栗山宗春	富山浅右衛門
私立	井ノ岡学舎	浄妙寺	信太郡井ノ岡村	明治6年	山岡藤助	宮本善左衛門
私立	牛久学舎	勸成院	河内郡牛久村	明治8年	黒須嘉市郎	佐野庄作
私立	岡見学舎	仮校舎	河内郡岡見村	明治8年	鈴木柳輔	中島幸蔵

注) 私立の授業料/学校主欄は「学校主」:当時の村の代表者(戸長や副戸長)

明治9年、奥原学舎と井ノ岡学舎が、明治10年には、牛久学舎、岡見学舎も公立となり「学校」となりま

した。明治10年には卒業生も記録されています。この5校の明治8年から10年までの生徒数と卒業生徒数は次のとおりです。

設立年 (明治)	名 称	明治8年		明治9年		明治10年		
		男生徒	女生徒	男生徒	女生徒	男生徒	女生徒	卒業生徒
7	下根学校	50	1	56	1	52	6	男3
9	奥原学校	28	4	48	46	35	15	男8
9	井ノ岡学校	84	6	102	18	95	18	男10
10	牛久学校	77	19	79	15	90	8	
10	岡見学校	40	2	45	2	43	4	男4

当時の学校運営は、地域住民に課せられた「学資賦課金」によっていました。他に授業料、寄付金など人びとの教育にかかる負担は相当なもので、このことが就学年齢に至っても未就学を生む要因にもなりました。

市内には上表にある教師を顕彰する碑が、最初の教場となった土地ないしその付近に建てられています。山岡藤助先生は井ノ岡の浄妙寺に「山岡乾斎先生頌徳碑」、栗山宗春先生は奥原の北原観音堂に「栗山宗春之墓」、黒須嘉市郎先生は牛久の勤成院に「東済黒須加市郎之墓」、そして鈴木柳輔先生は岡見の宝積寺に「鈴木柳輔君碑」とあります。明治初期からこの地の教育の基盤確立に貢献された先生方への地区住民の感謝を汲み取ることができます。

(5) 奥野地域の教育と人々 (2004/11/26 記)

明治5年(1872)の学制発布に沿って、奥野地域には二つの学塾が生まれました。市域全体で五つのうち二つ。当時の人口を記録に残る明治22年の人口(奥野地区2,568人、岡田地区2,018人、牛久地区2,078人)と大差なしと仮定すればほぼ1,000人に一校の小学校。

名 称	教 場	設立年	教師 男1	明治8年生徒数		明治9年生徒数		明治10年生徒数		10年
				男	女	男	女	男	女	卒業生
井ノ岡 学舎	浄妙寺	明治6 年	栗山宗春	84	6	102	18	95	18	男10
奥原学舎	願名寺	明治7年	山岡藤助	28	4	48	46	35	15	男8

井ノ岡学舎および奥原学舎(後「学校」)とも3年目で卒業生をだしています。山岡先生の教え子には、のちに教育界で活躍した人材が多く、明治13年久野村民が井ノ岡小学校から分離し久野小学校を起こしたときの最初の教師:増田仙之助(久野の鹿島神社境内に「増田仙之助君」頌徳碑)あり)もそのひとりです。増田先生は明治19年11月久野小学校の廃止に伴い他校に転任しましたが、明治37年再び久野に戻り奥野尋常小学校の訓導兼校長になっています。

奥野小学校正門脇に「長沼成美先生寿碑」が見上げる高さで建っています。この長沼先生も山岡先生の教え子で明治13年島田村民が久野村民同様、井ノ岡小学校から分離し島田小学校を設立した際、若干16歳で最初の教師となりました。

井ノ岡および奥原学舎に始まる奥野地区の小学校の現在に至るまでを整理すると表のようになります。明治5年政府の国民皆学方針から小学校令、町村制施行、新小学校令とめまぐるしく変わる政府のもと、旧村単位の小学校誕生、あるいは一村一校方針による統合などに翻ろうされていますが、常に地区住民の教育に対する高い関心と協力によって乗り切っています。

明治22年の町村制施行にもとづく奥野村の誕生以来、村の予算に占める**教育費は驚くほどの高率でした。例えば、明治41年では57%**とあり、**大正12年には66.49%**にも達していました。村の複数の学校維持や災害に伴う新校舎の建築など、基本的に住民の負担によるもので、多く篤志家の寄付に頼ることもありました。

昭和30年の新生『牛久町』誕生から10年目にあたる**昭和40年、奥野地区の2小学校1分教場は統合**。当時の宮本町長が、近代的校舎建築を思い立たれたことで、奥野地区の教育環境は一挙に整うことになりました。地区住民は校舎に劣らぬ校庭環境の整備をもってこれに感謝しています。

(6) 奥野小学校の誕生 (2004/2/10 記)

旧奥野村の奥野第一小学校および奥野第二小学校と奥原分教場は、昭和40年に統合、「**奥野小学校**」の誕生となりました。

この奥野統合小学校の建設は、3か年の継続事業で昭和40年5月、山林であった現在地(久野町725番地)の整地作業からはじまりました。同作業は、**陸上自衛隊勝田施設学校**の手によって7日から13日に実施、**200人余りの地元の方々の**毎日の勤労奉仕による根株の片付けや根はだきなど行われ見る見る平地に変わったとあります。敷地総面積13,759平方メートル(1町3反9畝20歩)におよぶ広さです(広報うしく79号)。

校舎の建築は、昭和40年8月第一期工事を起工、翌年3月30日に鉄筋コンクリート3階建て、普通教室6室、特別教室3室(家庭、理科、図工)、延べ1,059平方メートルの完成をみて、新校舎で**6年生77人の卒業式**を行っております。この校舎は当初高学年の使用でした。引き続き第二期校舎の建築に着手、**昭和42年1月**、普通教室6室、音楽室、作品展示室など延べ1,103平方メートルを完成、これまでの3教場(第一教場、第二教場、奥原分教場)から新校舎に移転、はれて**全校児童による学習が可能になりました**。昭和43年2月6日には講堂兼体育館や給食室、保健室、更衣室など完成。**統合小学校校舎完成のこの日:2月6日が「創立記念日」と**なりました。昭和44年6月20日、他校に先がけ長さ25メートル、幅13メートル6コースのプールが、徒歩プール、浄化槽ふくめて完成しました。

奥野小学校は、統合初年度から県教育委員会の国語教育の実験校に指定されています。そもそも統合前の奥野第一小学校の社会科は県南きっての有名なもの、さらに奥野第二小学校は、国語科研究で県下に名をはせていて、その2校の統合だけに研究の素地は十分に整っていたといえます。

昭和50年11月5日初代校長:**中島英敏**先生は、奥野小学校創立10周年記念式典において、「みごとな白亜の教育殿堂や、美しく整備された校庭にふさわしい教育内容の充実を果たすことこそ、町にも父兄にも報いる道と心に誓った」と述べられています。その成果は目覚ましく、昭和43年作文研究を認められ**第13回学研国語の部で教育賞を受賞**、44年県南地区国語指定研究発表会開催、45年読売教育賞受賞、49年全日本国語教育大会開催と続きます。

これらの研究により『国語教育年鑑』(明治図書版)に44年から毎年紹介されるようになり、奥野の名は全校に広まっていきました。昭和50年8月、小学館発行の教育誌『総合教育技術(8月号)』に全国有名校として紹介、「学校指導法の研究」並びに「作文教育の基礎指導研究」をとり上げ、国語研究校の全国優秀校の一枚に挙げられています。

父兄による校庭環境の整備は、その後受け継がれ昭和43年花壇コンクールで努力賞、47年花いっぱいコンクールで優良賞、49年花とほうき環境美化コンクールで優良賞を受賞しています。

(本稿は広報誌うしくを参照。広報誌うしくは昭和33年4月10日発行が一号で牛久町の歴史を辿れます)

付録)学校名『奥野』, その特徴

奥野小校区 奥野小のなりたちが分かります

校区の小坂、久野、正直、桂、報徳、島田、井ノ岡、奥原等々これらは古くから認められる伝統ある地名です。□□表『牛久市域の変遷(江戸時代末期～現代)』をご参照ください□□

記録によると本校は、廃藩置県(明治4年)から二年後の明治6年4月、井ノ岡村村立井ノ岡小学校の誕生というのが始まりで明治13年7月、分離して久野小学校となり、明治22年7月、「奥野尋常小学校」になりました。校名の『奥野』は、地名の「奥原」と「久野」から引いたものでしょう。これ以降行政の合併を経ても今日に至るまで続いています。□□表『奥野地域小学校の変遷』をご参照ください□□

ちなみにその後の校名の変遷は、明治29年3月、高等科を併置し奥野尋常高等小学校。大正元年12月、元号改定とともに同名を。太平洋戦争勃発の昭和16年3月31日には奥野第一・第二尋常高等小学校となっており、翌日4月1日、『尋常高等』から『国民』に改称、奥野第一・第二国民学校となりました。

昭和30年2月奥野村は牛久町(注1)に合併編入、牛久町立奥野第一・第二小学校となりました(注2)。昭和40年4月、奥野第一・第二小学校と同分校は統合され牛久町立奥野小学校に。昭和61年6月1日、市制施行にともない茨城県牛久市立奥野小学校となっています。

昔の奥野小の規模 今の規模と比べてみよう

昭和の合併により29年元旦、牛久村は町村制を施行。同年4月1日岡田村と合併し新牛久町誕生。昭和30年2月10日牛久町は奥野村を編入合併し新牛久町となりました。(牛久市史「近現代II」)

この時期、奥原に下表のとおり奥野第一小学校奥原分校がありました

昭和32年度の牛久市町立小学校生徒数・職員数				
校名	生徒合計	学級数	職員数	所在地
牛久小	811	19	21	牛久2606
岡田小	569	13	16	岡見2050-2
岡田小下根分校	115	4	4	下根555
岡田小女化分校	138	4	4	柏田3574-508
奥野一小	258	7	8	久野乙500

奥野一奥原分校	67	2	2	奥原2219
奥野二小	228	6	7	久野甲3511

牛久市史「近現代II」ページ676より転載 本表には昭和32年～34年度まであり、生徒数推移はほぼ同数

付録)筆者と奥野 平成16年(2004年)12月記

奥野とのかかわり

奥野を知る (2004/9/16 記)

1973年7月1日筆者一家はこの地の住人となりました。東京から故郷:北九州に似た土地の匂いを求めてのこと。当時(1973/6/30)牛久町の世帯数は、6,412。人口 24,364 人でした。今日(2004/8/31)では 27,751世帯、76,275人ですからそれぞれ 4.3倍、3.1倍になります。首都圏近郊住宅地としての発展にほかならず新住民によるものでしょう。16年以降の伸び率は鈍化しているものの漸増しています。

2014/5/31 整理		世帯数	伸び率		人口	伸び率	
昭和48年	1,978年6月	6,412	1.0	-	24,364	1.0	-
平成16年	2,004年8月	27,751	4.3	1.0	76,275	3.1	1.0
平成25年	2,013年3月	34,160	5.3	1.2	84,019	3.4	1.1

ほどなく子供達が奥野小学校にお世話になるようになり、この地の人々の学校・児童に対するあたたかい思い入れを感じるようになりました。『地域まるごと素敵な何かがある。恩返しをしたい』。この関心がリタイヤを早め小・中学校での情報教育ボランティアに駆り立てた、みなもとです。これから、比較的古い(31年目)新住民ではありますが、ほとんど何も知らない”我が終の棲家”となった「牛久のこと、奥野のこと」調べていこうと思います。幸い牛久市には、大部な『牛久市史』が刊行されています。まさに宝の山。少々気後れしますが、拾い読みを繰り返しつつまとめ掲載してまいります。より詳しくお知りになりたい方、是非中央図書館へお運びください。

中世の城跡 (およそ450年前)

鎌倉時代から南北朝、室町時代、戦国時代には、この地にも城がありました。今日よく知られている白壁の城郭と天守閣、石垣の積まれたという見慣れた城(安土桃山以降に見られる施政者の権威の象徴と治世の拠点としての城)ではなく、天然の要害(川、沼、谷津等)に囲まれた小高い大地(丘陵)に人工の堀や土塁を掻き揚げた攻防の拠点とした砦のような城です。

校区には、小坂城(小坂団地西側)、久野城(久野)、桂城(桂)、岡見城(岡見)など。区域を広げると牛久城(牛久沼に面した城中)、東林寺城(東林寺)、遠山城(遠山)。さらに伊奈に足高城。龍ヶ崎に龍ヶ崎城、美浦には木原城があり、筑波山の近くには鎌倉期、この地の守護職であった八田氏の居城:小田城があります。

どれも遺構、遺跡としたもので目立つ構築物があるわけではありませんが、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった広く知られた人物の陰で、逞しく生き抜いた土地の人々の生活を想像するきっかけとして、土塁跡、谷津など確かめてはいかがでしょうか。それは遠い貴方の先祖の躍動する物語のはじまりです。

牛久市域の変遷												
江戸時代		明治							昭和			
		4/7/14	5/4	8/9	11	15/3	17/6	22/3		29/4/1	30/2/10	61/6/1
		廃藩置県	新治県	茨城県	郡地分割	連合村	改正連合村	市制・町村制		昭和の合併		市制施行
								旧村名	新村名			
関宿藩	小坂村	土浦県	小2区 小7区	8小区 4小区	信太郡	久野村	奥原村	小坂村	奥野村	奥野村		
関宿藩	正直村							正直村				
関宿藩	久野村							久野村				
関宿藩	大和田村							久野村				
関宿藩	奥原村							奥原村				
関宿藩	井ノ岡村							井ノ岡村				
関宿藩	島田村							島田村				
関宿藩	桂村							桂村				
前橋藩	太田村	前橋県	第一大区	11小区 7小区 6小区	河内郡	板橋村 猪子村 下根村 猪子村 牛久村	八代村 赤塚村 牛久村	上太田村	岡田村	1/1付牛久町	牛久町	牛久市
土屋氏	結束村	宮谷県						結束村				
牛久藩	猪子村	牛久県						猪子村				
由良氏	東狸穴村	茂木県						東狸穴村				
由良氏	東大和田村							東大和田村				
土屋氏 牛久藩	下根村	牛久県						下根村				
牛久藩	中根村							中根村				
牛久藩	岡見村							岡見村				
土屋氏 小川氏	柏田村	宮谷県						柏田村				
牛久藩	田宮村	牛久県						田宮村				
牛久藩	牛久村							牛久村				
牛久藩	城中村							城中村				
牛久藩	新地村							新地村				
牛久藩	遠山村	前橋県						遠山村				

注)大和田村は明治19~20年の間に久野村に合併
 大田村は明治12年に上太田村と改称
 明治22年3月の市制・町村制で旧村名を大字となる。牛久村に庄兵衛新田の一部編入
 昭和30年2月牛久町に阿見町福田の一部編入
 牛久市史近現代Ⅰ ページ5 表1-2をリフォーム

奥野地域小学校の変遷

1873	明治6年		(M6/4/6) 山岡家塾 山岡藤助			
1874	明治7年	(M7/2/4) 栗山家塾 栗山宗春				
1875	明治8年	奥原学舎 (願名寺)	井ノ岡学舎 (浄妙寺)			
1876	明治9年	奥原小学校	井ノ岡小学校	井ノ岡小学校から分離独立		
1880	明治13年		(M13/5/5) 井ノ岡小学校	島田小学校 長沼 成美	(M13/7) 久野小学校 (観音寺) 増田仙之助	小坂小学校 (M13/6)
1882	明治15年 (M15/11/8)	5学区 奥原小学校	5学区 井ノ岡小学校	5学区 島田小学校	6学区 久野小学校	6学区 小坂小学校
1884	明治17年 (M17/11/29)		3学区 中等井ノ岡小学 校	3学区 初等島田小学校	3学区 初等久野小学 校	3学区 久野小学校 分校
1886	明治19年 (M19/11/25) 小学校令	3学区 奥原尋常小学校	3学区 奥原尋常小学校 久野分校			
1889	明治22年 (M22/6/5) 町村制施行	4学区 奥野尋常小学校 (M25/7/21廃校)			4学区 奥野尋常小学 校 久野分校	4学区 小坂分教場 (M25/7/21廃止)
1892	明治25年 新小学校令 実施		(M25/6) 奥野尋常 高等小学校 (井ノ岡)	奥野尋常小学校 久野分校		
1895	明治28年	(M28/11/27) 奥野尋常小学校 奥原分教場				(M28/11/18) 奥野尋常小学校 小坂分教場 (M33/3廃止)
1896	明治29年		(M29/10/17) 奥野尋常 高等小学校 (井ノ岡阿弥陀堂後)			
1900	明治33年	(M33/4) 奥野尋常高等 小学校尋常科 奥原分校		(M33/4) 奥野尋常小学校 (久野向花)		
1909	明治42年					
1914	大正3年	(T3/9) 奥野尋常高等 小学校 奥原分教場	(T4/) 奥野尋常高等小学校 (大和田台:本校)	(T3/9) 奥野尋常高等小学校 久野分校		
1941	昭和16年	奥原分教場	(S16/3) 奥野第一尋常高等小学校	(S16/3) 奥野第二尋常高等小学校		
		奥原分教場	(S16/4) 奥野第一国民小学校	(S16/4) 奥野第二国民小学校		
	昭和xx年					
1955	昭和30年	奥原分教場	(S30/2) 奥野第一小学校	(S30/2) 奥野第二小学校		
1965	昭和40年		(S40/4) 牛久町立奥野小学校			
1986	昭和61年	(S61/6/1) 茨城県牛久市立奥野小学校				

(M42)奥野村立奥野農学校⇒(T15)奥野農業公民学校《奥野尋常小学校に併設》⇒(S10)奥野青年学校